

バストス週報

第三百六十号

昭和二十二年三月三日発行

DIRECTOR KOITI MORI
REDATOR SHION ODA

RUA PRES VARGAS 188
C. P. 112

BASTOS C. P.

ANUAL 100\$-

連日總會

採点

去る二月二十四日の連日日本人会總會は、近まれば賑やかな總會で、何かのコンウールならぬレミオのつくろい、色んな物も見物象も急速に腕を上げたかの観がある。

演者として華々しい演技を見せたのは各口会長であつた。野球に見えても、名捕手という外、腰に一段とぶくらみがある。ピンチをもちたらない、応答ぶり、ジュエスな下、それからひらりと転身する、あざやかな球を落とす一寸頭をかいて、ニツコリする餘裕があり、谷口フアンは、すっかりよろこんでしまった。

ナイソの面々が、トネルなぶるやると大急ぎでカバリする、即ち自ら答辯を買って出て、めんわり鋒先をかきわすあたり、そこらにころがっている凡石とは味がちがう、四年間のみがさのかかつたことも、たじかだが、アイヌやクマンの後裔とちがい、さすがに人柄が天孫族たることを裏書きしている。

山下画伯に採点してもらつたら、少時がところろはあろうということだつた。

本田總督は野球にたええら連日會の

ピッチャーで投手として、まを肩がよわい、サイン無視で直球の連発を、捕手がつかんでくれるので安心して暴投する。しかし攻撃陣の大物を大でいフライに打取つて、カイメツを免れたのは、美事であつた。正やん事本田總督は唯一の武器たるラッパにものをいわせ、リュウロウたる美音をきかせる、但し分岐液多通にして自三脚酔のさらいなきにしろあらず、とが河とかうがった批評をする人もある、といはいえ二期の経歴で、ユンペイトウの角がとれ、いうことには、味がついて、来て第一、大物に育ちよつた、總會のミスといふは、ケツをとるのがおそく、いたぐらに時風を空費したことだろう、しかしてヒツトもあつた、パウロ渡辺氏の質問には、一応、道を通つて、漆よく謝罪の態度に出たのは、これのどつた、さて採点だが、これの心づかり中隊長格というものが正直なね



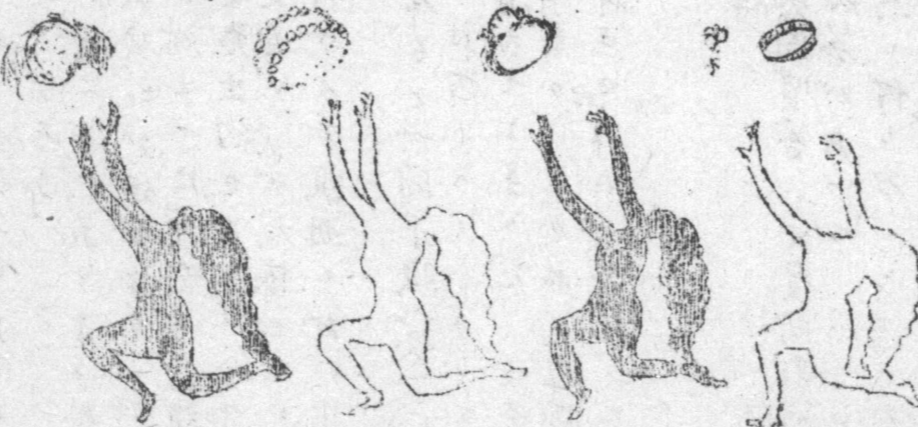
Alphaitoria Imperial
洋服の
作命命は
丸山
洋服店へ

中村時計店

ツバン市 ホントテオニマス前

RELOJOARIA CONFIANCA T. NAKAMURA TUPA

- 紳士用
- 婦人用
- 腕時計
- 指輪
- アリアンサ
- フリッコ
- 首飾
- 宝石類
- 眼鏡
- 楽器類



ツバンへ御出かけの節は
御立より下さい

攻撃第一陣

連日會幹部の一人々々に採点のレンズを覗くこととする、当日の質問陣は守を眺めることと、中々さにあらず、準備の心臓を寒からしめるようなのに出ないのかと思つたら、中々さにあらず、ドカンと一發迫撃銃がさくわつた、パウロ渡辺氏が、放したものが、引上り、之れは、震動、真下、両士がバストスを引上り、甘受すべきものではないとの建前、御返直上、おれのことによるいきさつ

畑師

浦島乙考

地の中から石油を掘して
運んだロウソクをラリは山師、海の中から
タマで真球をつくり出すは大海師と真
球三御木本幸吉翁は口癖に自慢した由
が、無の畑からゴロゴロ大畑師と云ふ
と人とは、差当り、大畑師と云ふは
か。

アフリカの百姓はトバクをど割切つて
一か八かの勝負を試みる人も、賭を絶た
ない。幸災去年の西風作りなどは大当り
当てた部夫で、近主律大元と云ふは、
水車作物を育て、牧場を持ち、米も豆
も蒔いと、修身教育の實踐的農業は誠
に安泰で、確実に儲かつて行くであらう
が、しかし極楽は退窟を相だ。地獄の方
が変化があつて面白。というマコノジヤ
ク派も居る。

一方に生活の基礎を確ち立て、その時
その年の見とおしによつて百姓トバクを
試みるのト仲の男性的な魅力があるの
はなからうか、これに全精力、全財産を
賭けての勝負となる一寸積成し難い
例へば手のある農家なり養鶏、養蚕と言
つた主軸を外に、ニアルケールの西風
を試るとか、アメンドメンを蒔くとか、
その年の予想によつて一勝負張つて見る
は危険性も無く、当れば去年の西風の
如く思はぬ大金がこぼれ込むこともある。

商家にも一応の見切りをつけた、さる
大家の若旦那の店の賑わいに牧場経営に
眼、唯草を蒔く文では甚だない話と、
内の何アルケールかを耕して西風を播
いた、何事にもコリ性、肥料、灌漑、摘
れを实地に試みた。十年の西風作りも
以てぬ素晴りの作をこつた。追肥が効
いたが二番成りが又見事に実のつた。追
肥が尻上りに上昇して二番成りが、さ
り予想外の利益になつた。売りものに
らぬ残西風を種とつた。ネロ一コント
が何袋か売つた。つきすきささる話だが
事實から仕方ない。

桐の下に泥鰌は三匹いる
西風の跡の残り肥料を利用して今度
アメンドメンを蒔いたとのこと、タネは在
来種ではなく、三、四倍の収穫量のある
いう大粒新種を苦心して手に入れ、突貫
作業で整地してバタ／＼と手つて、
あともう一匹の泥鰌を捉り可く若旦那
日境敷にたつぷり自信の色を漂はせ、
縦横にトラットールを走らせていた。果

(下タンへ)

して畑師と稱を呼べるか。レカレ畑師の
タマゴたる幸日確実であると思ふ。

ことしから始めました
カミニオン のリッセンサを
トモイユエ とるには...
迅速・確実な
西事務所へ

Relojeria Takata
高時計店
学生用 堅牢な 腕時計
「マルカ・チソット」十人限り
原價で(もとね)
としあはます
（狂わな...これない）

讓店御挨拶
パタリア・ロイヤル 菊地 豊
わたくれニと長年パタリア・ロイヤル
を經營中、一方なりぬ御引立を蒙
り、ありがたく御礼申上はます。こ
のたび家事の都合上、カスカッタ区
御出身の青山幸史さんに店の権利一
切を御譲り致しました故、何卒旧に
倍し御最下下さる様御願ひ申上はま
す。

ポン店開業
三月一日より、パタリア・ロイヤルを
引受け開業することとなりましたか
ら、どうもよろしく御願ひ申上はま
す。前店主同様ごひいきに願ひます。
簡單ではございますが右御挨拶申上
はます。

パタリア・ロイヤル
青山幸史

バストス教会 決算報告書

自昭和三十年十一月
至昭和三十一年十二月末

収入之部

前年度繰越金	一〇〇・一・九〇
銀行利息	一四・一九〇
雑収入	二六・〇〇
漢氏寄附(古民、西氏法礼)	四〇・〇〇
速日会より慰霊祭法礼	一五・〇〇
石田良一氏追善供養寄附	二〇・〇〇
吉田与三吉氏漢氏より法礼キフ	二〇・〇〇
宮武勝氏追善供養寄附	三〇・〇〇
漢氏より寄附	七五・〇〇
サウテ区より法礼	二〇・〇〇
漢氏より寄附	一〇・〇〇
伊勢島氏より追善寄附	三〇・〇〇
渡谷秀次郎納骨寄附	三〇・〇〇
西原高右氏追善供養寄附	五六・五〇
柳浦氏追善供養寄附	一〇・〇〇
鶴義雄氏より寄附	一五・〇〇
墓地にて御供	九・〇〇
柳浦礼三氏法礼	一〇・〇〇
漢氏寄附(佐藤操氏法礼)	三〇・〇〇
樋野上義男氏追善寄附	五〇・〇〇
漢氏寄附(古田氏法礼)	二〇・〇〇
漢氏寄附(浅原氏法礼)	二〇・〇〇
銀行利息	一七・一四〇
合計金	一〇〇・四六・二〇

支出之部

模範開教師法礼	五〇・〇〇
模範開教師使用自動車賃	一七・〇〇
漢氏マリア・オニス出張費	一七・五〇
藤本開教師自動車賃	一〇・〇〇
藤本開教師法礼	二〇・〇〇
週報広告代	一〇・〇〇
週報広告代	一〇・〇〇
週報広告代	一〇・〇〇
昭市へ電話其他	一五・〇〇
藤本開教師法礼	一〇・〇〇
川口昭二氏法礼	二〇・〇〇
若田漢小林三氏法礼	三〇・〇〇
週報広告代	一〇・〇〇
雑費	一〇・〇〇
サウテ区慰霊祭御供	二〇・〇〇
サウテ区行自動車賃	一〇・〇〇
サウテ区慰霊祭御供	二〇・〇〇
サウテ区行自動車賃	二〇・〇〇
登坂開教師法礼	二〇・〇〇
週報広告代	三〇・〇〇
納骨堂建設費不足分福氏立替分	一三八・八九〇
ホンスン区慰霊祭御供	二〇・〇〇

合計金

週報広告代	八〇・〇〇
車馬賃	一五〇・〇〇
産業会館幕代寄附	一〇〇・〇〇
右之通り決算報告申上必ます	二九六・三〇
昭和三十一年二月八日	
バストス佛教会	
会計 吉田与三吉	
合計金	七〇八・三九〇

御礼

金考ミルクルゼーロス也
 嚴父左様の御供養として病院維持費に
 御寄附下さい誠に有難うございます
 病院会計 三野善一
 池田 巖 様

時計を落しました

去る二月廿二日(金)日本製腕時計(日
 附表示のある珍らしい型)を落しました
 場所は幼稚園あたりからウニオン区
 へ行く橋の辺までであろうと存じます
 もし御拾得心当りの方がありましたら
 御知らせ下さい。何分の御礼をいたし
 ます
 石橋方 霜出 静 二

吉浦秀次郎氏訪日帰国

カロリア区吉浦秀次郎氏は親戚のバ
 ルー在住小田作造氏同伴で来る三月十
 日発航の日航機で訪日されることとな
 った。氏は昭和 年の渡伯、直ちにカロリ
 アへ入植されたが今や身分移氏の少くな
 りつつある時最古参者としてバストス
 至宝となつてゐる人である。氏が公共の
 為め自治のため、又は組合運動の為め
 身を先して盡力されるは、よく人の知
 るところ。今回帰国に當つても、組合から日
 本の組合機構運営の実際調査を依頼され
 ている程である。氏の出身県は福岡。日
 本滞在は約半歳の予定である。

日本語の夜学を嫌う子供たち 糸音
 日本の食紅ほーと生姜坂る

蓖麻蚕

江原真之

大谷光瑞師が、亜細亞経綸の一環として中央アジア探険を実施し、長駆印度に歩を印した時、アッサム、ベンガル地方を始めとして、カシミール、ネパール地方に連ねがり飼育されている天然野生絹糸虫、蓖麻蚕ヒマサン、印度名エリ蚕モロ、(Philosamia Cynthia Reussel)に眼を著け之を導入を画されたのは満州事変直前の事とせらる。台湾農事試験所の小泉清雄博士(現岐阜農事大学教授)は三井物産方ルカツタ支店と連絡し、台湾への輸入に成功したものは昭和十三年二月廿三日か翌十四年には滿州へ、同十五年には朝鮮へと移され、小生京都高等蚕糸学校ニ学主夏期実習に南鮮全羅南道、光州原種試験所に一夏を送った時、始めて実習生として飼育したことを覚えて居ります。

昭和十七年鐘紡製糸会社は飼料「柶」(Albizia Dest.)を蓖麻樹の代用飼料として蚕種と共に内地全国に配布して積極的のこの事業化にのり出すに到りおられた。当時の社長陣田信吉氏は昭和十五年末頃

三月十八日 彼岸の入り
 三月廿一日 春分の日(お中目)
 三月廿四日 彼岸明け

ご存じの通り日本では彼岸を盛大に寺院等で修します。みかん詣りとして善男善女の参詣の姿も美しい情景です。

當寺では八十山師の旅行の都合で少し早目にいたします。

来る三月十三日夜八時より
 お彼岸會を執行いたします

読経法要御話

なごのございますから御信仰の方はうちつれておまいり下さい

バストス

梵真寺

世話人

より機会ある毎に蚕糸業の改造を唱え日本に蚕糸業は平面拡張をやめ、立体経営に移るべきとして、ホアラの如く空間へ蔓る樹木の葉を好んで食し、離食性の昆虫で生長の早い絹糸虫を取り入れるべきであり、吾が社は既にその用意があるところめかし、これが多大の反響を呼んだ。これに本誌を現わすに到ったのであり、昭和十七年五月十六日附にて既に発布された居る蚕糸業統制法により、家畜苗と同様の取扱いを受けることになり、戦時中十社に余る製糸会社がこの事業の普及に乗り出したものでした。

同羊末頃より、軍部内にエリ蚕熱が抬頭し、昭和十八年には軍部後援の下に南方移殖を企図し、マライでこの事業の開發に着手し始めました。

越えて十九年五月十三日附農林省織組局長の名を以て、蓖麻蚕の飼育及びその高の配給に關する指令を各府県知事に達し、蓖麻蚕苗の生産指導統制を計つて居ります。

昭和二十年に入り海軍がその獎勵に積極的ののりだし、各社の飼育地帯を全部海軍に移譲し、中央農業者会は海軍の代行者として、系統農業者会を指揮し、高増産を進め、生産高は海軍が直接購入の上、担当会社に割当てて居りました。

八月十五日の終戦と共に軍部の自然消滅と戦後の食料事情悪化並に見送り生産の増産が因で蓖麻蚕熱は下火となつておいたわけですが

鐘紡野蚕研究所長三島克巳氏、小泉清明博士、山根義寛博士(現京都工業繊維大学教授)等々の其の後の研究改良の結果、移入当初十一%前後の高増産割合が今では十五乃至十六%に向上し、先般既に一八%の物産固定されたと云つて居ります。

蓖麻蚕の王飼料たる蓖麻樹は熱帯から亜熱帯に跨りて生育し、温帯、温帯にも生い茂つていて之らの地方では蓖麻を有利な作物にする為の印度から輸入を企て、その輸入には属々失敗を重ねつつ



Para completar a sua a felicidade de sua esposa adquira suas alianças na

Nossa Reloaria

AV. TAMPIOS 785
 Tupã

時計と貴金属の最も信用ある
 ツパ市

ツサ時計店

漸く輸入に成功した国を以てイタリア、マ
 ルタ島、ブリッピン、仏領印度、海南島
 エジプト、英領ソリニカド島、パレス
 ナ、オ、濠州等々、近年に到り、台湾、
 朝鮮、日本、沖繩、中華民国、ジャバ、マ
 レで飼育されるに到りました。
 然し輸入後の各国の成績は頗る不良で
 その主たる原因は、冬期の世代維持が困
 難な事と、産卵が特殊なフライハミア属の
 開孔菌で、解舒率悪く、解舒未長が著し
 く短かい短繊維である事、即ち煮湯処理
 採糸技術に特殊な工程を必要とする事、
 加うるに染色整理に於ける問題のある
 為め、一方その比類なき強度、羊毛の
 如き触感等は印度の巻布サリス(Salis印
 度人の長衣)及びドレー(Deo)印度人の
 睡衣)に似ている如く、独特の風味をもつて
 居るに拘らず放置状態となつて居ります。
 營業のみを造る事業家と相対的に学者
 技術家の一群は着々と進んで、これが品種改
 良に専念し、山樹松土固定の日清十一号
 並に三八号は伯國に於ける通統(レンゾク)
 飼育と完全淘汰により、優性因子増殖の
 可能性を大いに含んで居りました。
 即ち昭和二十九年十一月十五日五令益
 食期の吐蚕百頭を船中に持ち込み南支那
 海の上級管崗させ、冷蔵庫に率民七度
 で冷蔵して参りました。この多化性蚕は
 蚕種の冷蔵は不可能で、蛹期に四〇日以
 内しか冷蔵に耐えない為め、サントス上
 陸廿年一月十五日迄の経過日数概算を考
 慮して、かかる面倒な手段をとつたわけで
 す。勿論厚紙の葉はビニールに包み冷蔵
 庫に入れて給与して来たわけでした。バ
 ストス工場搬入後孵化に成功、一時は相
 当の数量に達増加させ、之から淘汰研究
 と向わんとした途次、管理の不注意によ
 り被害に罹つた事は残念に存じます。
 先般東京農工大教授中川房吉博士から
 次のような奇信を受けました。「ラジール
 國ヒマ蚕繭の製糸並に同繭紡績について
 は近く本学部製糸科卒業生が一月に一人
 三四月頃に一人ラジールに行つたことにな
 つてをります。ラジール、この入連によく申し
 ておきます。同繭処理が稍々むづかしい
 ので果してうまくやれるか疑問です。戦
 前滿州産、梓蚕繭、天蚕繭は滿州ではう
 まく製糸紡績が出来なくて、日本へこれら
 の野蚕繭を輸入して日本で製糸紡績が多
 く行われて居ました。
 ヒマ蚕繭も天蚕繭も梓蚕繭と同様に製
 糸紡績に相当の技術を要するものと思わ
 れます。將來ラジールでヒマ蚕繭が大量
 に生産された時は戦前の滿州産野蚕繭の
 如く、繭のまま日本へ輸入し、日本で
 同繭紡績機械、染色に利用すること考
 えられます。近江絹糸紡績株式会社はラ
 ジールに此等の計画を進めて居る様にさ
 いらいます云々」
 下段左欄につづく...

Instituto de
BELEZA
 HELENA
 Maki Shimoide
 Ponto de
 Rodoviario
 de
 Bastos



三月一日から オニハス
 發着所 樓食堂
 美容院を開業いたしました
 新式のマキナで
 迅速丁寧親切
 一度おかけ下さいませ
 霜 出 ま き

寫真見習生 莒分集



シヤシンミナライ ボシユウ
 年令二十歳未満
 身体健康の者
 寫真術を習得してあげば
 伯國では大いに将来性があります
 青草ニ三名を求む
 本人直接 未談あれ
 アオマンチーナ市
 コスモス寫真館
 植 祐 三 郎

何事も研究専一にして長い努力が実を
 結ぶというべきでしょうが、目前の営利
 のみに走らば、前途に洋々たる希望を持
 ち、野蚕と取り組むのも、必ずしも無駄
 な事ではありませぬ(二月三日記)
 (莒とは悪臭のある五六天の葉草) 写習生あり

第二回
ブラジル史

到着、御注文者位口といた
申いで下さい

産業、文化の面より書かれた興味あるブラジル研究書（東京河上書房出版）の出版（頁一八〇計）
ノルウェーの風土と社会（スウェーデン領事官著）
月刊「エスペランサ」
二世男女に「かき」で日本誌を習得させよう
という主張の指導誌（年一〇月号）
一読を乞ふ
週報社

聖市中央会と
協力して

PONKAN



Coop. Agri. de Bastos

ポカン の販賣に

カと入れ 萬全を期すことと
なりました

有利に親功に取扱いますから
御利用下さい

輸送用木箱の用意あり

ポンカン付バストス名物

信用を落とさぬ様、良果を選ん
び出荷いたしましたよう

詳細は 鶏卵部の

松本係員迄

バストス産業組合

組合員各位

デブリアドール

ミリーヨの脱粒は
速くて丁寧

野沢一衛へ御

用命下さい

カンボス・サレス街 カネア向

又はアマール街 坂垣葉向向角
田地園田共産商会の

阿部氏へ御申下さい
まぐ連絡あり

訪日御挨拶

合掌 有難う御座います

残暑の候御尊家皆様には益々御清
栄の段慶賀の至りに存じます

私事

皆々様の厚き慈愛と愚息の温情によ
り、又しき念願が叶ひ、此の度懐し
き母国へ暮参旁々近親、知友訪問の
為の訪日の旅を致すこととなり、未
だ三月十日午後一時聖市コンゴニア
空港発の日航機で空路祖国へ向ひ、
東京都羽田空港着は同月十四日午前
十時の予定となり、諸用の為の当地
出發は本月二日午前八時に致しまし
た

就きましたは御愛念深き皆々様より
は実に身に余る盛大なる壮行祝賀の
宴を張り、感涙にむせぶ数々の祝辞
を戴き、且つ過分の御餞別迄もかた
じけのうし、尚去後の際しては、御
多忙中にもかかわらず、態々御見送
り下され、御厚情の程唯々感激に堪
えず、身の仕合せと燕上の光栄を涙
を以て御感え致すのみでございます
実は御礼をかね御挨拶に御伺ひ申上
れるのが本意であります、出發前
多用に遣われてその意を得ず、茲に
週報紙上をかりて、謹んで御礼を申上
ります

尚末筆下ら皆々様の彌増御健康と御
多幸を祈りつつ訪日御挨拶のことば
と致します
合掌再拝

一九五七年三月二日

バストス出發に際し

吉浦秀次郎

スロリア第二巴御一同様

産業組合 御一同様

生長の家 白鳩 御一同様
青年会

福岡県人会 御一同様

バストス在住各位

吉浦氏談「二十八年振りの帰国です、萬感云
末の心情です、私用とすませ、出身郡内を一巡し、農
家多忙の頃を見計らって、上京、しばらく生長の家本都
を訪問したいと思ひます、その間、折りをみて週報社へ
けでる限り通信したいと考えて居ります、産業組
合からの色々便宜を御計下さいました、私共此度、
帰伯したら、一功公藏から退いて静かに精神生活の
三昧に入りたいと思つて居ります云々」

三月三日は桃の節句

女兒の将来を寿ぐ意味から三月三日を
雛の節句として祝ふが、ヒナ祭はゆかし
い行事である。フラジルに育つ子供たち
に何と行事の少いことよ。情操教育の面
からいつても、カンナバルのフダケタ踊
りなどは芳しくない。(あれはヨイドレたちのわ
そびだ)元の古い教科書にヒナマツリの
歌があり、モーション、必イリサマ、ゴラ
バマシ、カンジヨ、ホンホリ、シロカケ、ヒシモチ
などの文字があるが実物が無いので説明
にこまる。子供の情緒をマシマシ、いたわ
りみちびく道はないものか。

太東雛人形天皇の御宇とかや 芭蕉
もたれ合いて倒れずにある雛かな 虚子

農家の皆様!

昨年は太郎田扱のりアツボで
うんと収穫したと喜んで下さつて
ありがとうございます
「ミア刈り入れだ 刈り入れだ」



Casa

Taroda

肥料のご注文は
早目の方がお徳です

よい条件でご利用を計り
ますから

至急御打合せに申して下さい

Casa
Taroda

太郎田商店

アネマール街

ラジオ

所有者に告ぐ

本年の聴取料十針也

三月中におさめて下さい

バストス郵便局

クラワジナ

Pague!
Registo aparelho
Receptor de Radio -
DIFUSÃO
concreto Bastos

カクジツ 確実なミシン修繕

私こと昨年御地へ参り、約二百台のミシ
ンを修理させて頂き、多くの方から感謝の
御ことはをいたわいて居ります。その二
三を左にかかゆさせていたたきます

ミシン修繕業
芝 伯 明
バストス、パール西野様方
自宅リンズ市カンホスサレスヘニ

カスカッタ女子青年一同一九五六年三月十八日
芝伯明様に講習をして頂きまして、為め
に存る事を教えて頂きまして私共一同
心から厚く御礼申上ります。(シンセル(色))
聯合日本人会別会長上西泰治 五三、三三
今迄にない非常に信頼のおける修繕を
して戴いて心より感謝致します。(バスター)

ウニオンズ区女子青年団池田栢子様
芝伯明様に各所の必要を部分 をよく
親切に教えて頂きましてお互にため
なる事で私共一同は心から感謝致し
す、五六年六月廿四日 シンセル一台

ウニオンズ区隠岐重珠様
廿五年間毎日の如く使いたしたシンが
「ミシン」直るも直った。新品より調
子がよくなつたと家内始の娘らの喜ば
は大へんなもので、その上修理のこと
も教えてもらい、今後ミシンについて
自信がふさねと喜んで居ります。これ
一筆に芝伯明様の御礼申上ります。御礼申
上ります。五七年一月十五日

シヤカラ区振家好子様 家政学校日語部
おみしん新しくなりし身持よき
ミシン 踏む度 心おこるも 二月六日

サウズ区伴藤盛生様 五七年二月十九日
今までも何人もミシン修理の方がみえま
した。これ程完全に直された方は居
ない様に思います。厚く御礼申上ります
チェコスロバキヤ製 ローター一台

まだ沢山ありますが紙面の都合で割愛
いたします。
どうか皆様、調子のわるいミシンがあ
りましたら、わたくしに診せて下さい
必ず新品同様にしておのにかかります。
決して通りがかりの者ではありません
自分の信用にかけて完全な仕事をし
よる二人でいたたくつもりでございます
(バストス内におきでも出張)

実説

北南米股旅記

サイト・イシナロ

三十年前のサンパウロ

いよいよ北米に見切りをつけて伯国渡航の決意をなしたが、今からふりかえつて見るとシブンの等のような北米米のしたもものには、どうもブラジルは田舎に見えていけなかつた。また住馴れた北米の方が生活も楽かつた。しかし何とかがして一ト顔上げようとする野蠻なつぼつとしていた頃だつたらから、思い立つたがサイゴ、押えることにはできなかった。

一九百二十七年、足かけ三十一年になつたが、三ノヨリから伯国行の船にのつて、フリリと渡航して、オノにいた。思へば、これがブラジル股旅のはじまりで三十年の浮浪生活が始つたのだ。

その時分の伯国は、エラソクな古い方が、社会制度といひ、文化施設といひ、至らぬ幼稚に見えた。奥地も開發されていながら、ナンパウロ市も現在のようには高層建築はなく、淋しい所だつた。今はオノナスが繁達して、近郊との連絡も、今はいつて居るが、交通といへば市内は電車一本槍、運搬なども、鉄輪の馬車が、大を市の中央市場も小さなものだつた。

規模が小さい通り、集積される農産物も少く、ここに集中する人達も僅かだ。現在の十分の一もなかつた様に思ふ。

思へば、この三十年間に、賑市も奥地もガラリと變つて、よくも悪しくも、むせみとふくれ上つてしまつた。ジブスが渡伯して、かろしニ三年たつと日本から新移民が、から開放されるといふと、奥地のマツト地帯に、進出し、僅か十数年の間に原始林を伐りつくし、尚奥へ、と進んで行く。

それ故に、漠たる荒地は、手つかぬ原野と化し、次々と牧場地帯に再生して行く。

今までのブラジルの産業として、数にも入らなかつた養鶏などが、牧牛畜産と並んで、クローブ、アソク、シブンなどの、十年の農業發展も、シブンなどの、目もくにも、何しるジブンの来たころは、百姓無肥料時代、したがって農家の収入も少く、一般の生活水準も低いものだつた。このころは、何となく、大きな金もうけなど、思ひも及ばぬと、くる早々がかりしたものが、入つたが、北米時代は、やらアク、おろと一日手べんとうで、五ミル位しかくれない。全く搖籃時代だつた。

こういふ社会に、今日こまれた日本移民は、よくのく、人ばかり通して、今日の基礎をき

31 MAR 1957

が、きよく、と感心せざるを得ない。人間は時代と共に進むというが、日本移民は、伯国で、たしかに一つの時代を創り出したといつてよいと思ふ。勿論多く移民の中は、志なうおし、路傍にへたつたもの、いわゆる落伍者も多かつた。奥地には、無限に振がつてゆく空間があった。その空間は、日本の農業者に一つの道路を与えてくれたといえるからう。

だが、このジブンは、フリリとブラジルへ、つて来て、一体何をしたら、いつのかが、ワラジをばいたり、ぬいたり思へば、長旅路のありくれば、あつた。(つづく)

重道商店

特製漬物桶

とくせいづけものあけが到着いたしました

大丸大和西瓜二世種

昨年大好評の西瓜種と同様のものがつきました。売功れど、なりのうち御申込み下さい

日本製フンサン機



BHCヲハレテ、アロコロシニツカッタダサイ、スバラシクヨクキキマス

Casa Colonia

UNEXAN ワネシヤン

ドイツ製アロコシ水溶液

その外、内外食料品いろいろ、入荷いたしました

皆さま、おまちかねの

Casa Kita

湯の花

僅かばかり入荷いたしました。賣りきれとなつぬ内、お早く、ゆいで下さい

Yu-no-ha-na

喜多商店

basta-me pedir lições para encontrar ainda mais do que as poderia dar.

Viveremos, mas cada um do seu lado. Depois, ao mesmo tempo que for dando as lições, occupar-me-ei a ensinar dois cães para substituírem "Zerbino" e "Dolce". Apressar-lhes-ei a educação, e na primeira poderá mos tornar a pôr-nos ambos a caminho, meu Remigio, para nunca mais nos separarmos, porque a fortuna nem sempre é adversa aos que tem coragem de lutar. E exactamente a coragem que te peço neste momento, e tambem resignação. Mais tarde, as coisas correrão melhor; isto é só para passar um tempo. Na primavera voltaremos á nossa vida livre. Levar-te-ei á Alemanha, á Inglaterra. Estás crecendo e o teu espirito começa a abri-se. Nome! este compromisso diante de Mrs. Milligan. Tânto-lo-ei. E em vista dessas viagens que comecei já a ensinar-te inglês, francês e italiano; e já alguma coisa para uma criança de tua idade; sem contar que estas agora já um rapaz forte. Verás meu Remiguzinho, verás, não está tudo perdido.

Ista combinação era talvez o que melhor convinha ás nossas circumstancias presentes. E quando agora penso nisso, reoñheço que meu amo fizera todo o possível para sairmos daquela situação deploravel. Mas os pensamentos resultantes da meditação não são os mesmos que os do primeiro impulso. Naquelle momento só via duas coisas:

Á nossa separação. E o "pádrone".
Mas nossas excursões pelas aldeias e pelas cidades tinha encontrado do muitos desse "pádrone", que levam á pancada as crianças contratadas daqui e dacolá. Não se pareciam nada com Vitalis, severos, injustos, exultantes, beberroes, com a injuria e a grosseria na boca e de mão sempre levantada. Tu podia cair num desses terriveis patroes.

E depois, mesmo que o acaso me desse um bom, era ainda, uma mudança Depois da minha ama, Vitalis. Depois de Vitalis, outro.
Isto seria sempre assim?

Nunca encontraria ninguém de quem pudesse gostar como de um pae. Não teria familia. Sempre perdido nesta terra, onde me não podia fixar em parte alguma. Teria bastantes cousas a responder, e as palavras subiam-me do coração aos labios, mas eu fazia-as recuar.

"Eu amo pedir-me coragem e resignação, queria obedecer-lhe e não lhe aumentar o seu desgosto.

Tambem, ele já não estava a meu lado, e voltara ao seu lugar poucos passos adiante de mim, como se tivessc vedado de ouvir o que previa que eu lhe ia responder.

Fui-o seguindo e não tardamos a chegar a um rio que atravessamos sobre uma ponte lamacenta como eu nunca vira; e neve, preta como um carvão moído, encobria a calçada com uma camada movediça onde a gente se enterrava até ao tornozelo. No fim desta ponte havia uma aldeia ó ruas estreitas, depois, em seguida a esta aldeia voltava o campo, mas não o campo estulhado de casas de aspecto miseravel.

Na estrada os carros seguiam-se e cruzavam-se sem interrupção. "Cerca-me-me de Vitalis e comecei a andar á direita dele, enquanto "Cepi" ia com o focinho nos nossos calcanhares.

Mas em breve acabou o campo e achámo-nos numa rua de que se não viu o fim; de cada lado, ao longe, havia casas, mas pobres, sujas e muito menos bonitas que as de Bordens, de Toulouse e de Lyão.
A neve tinha sido posta em montinhos aqui e acolá, e para cima desses montinhos negros e duros, tinham deitado cinzas, legumes podres, imundices de toda a especie; o ar estava carregado de cheiros fetidos, a cada instante, passavam carros pesados que obrigavam as pessoas a passarem um lado para o outro, evitando-as com muito cuidado, pois os seus conductores pareciam não tomar cuidado nenhum.

- Onde estamos? perguntei a Vitalis.

- Em Paris, meu rapaz.

Onde estavam então as minhas casas de marmore? Onde estavam então os meus habitantes vestidos de seda?

Como a realidade era feia e miseravel! Era aquilo o Paris que eu desejava tão ardentemente vêr! Era ali que eu ia passar o inverno, separado de Vitalis... e de "Cepi".

Apesar de tudo que nos rodeava me parecer horrivel, abri os olhos e esqueci-me quasi da gravidade da minha situação para olhar em volta de mim. Quanto mais nos adiantavamos em Paris, menos o que eu via corria e pontava aos meus sonhos infantis e ás minhas esperanças imaginarias; os ribeiros relados exalavam um cheiro cada vez mais infeto; a lama, misturada com neve e bocados de gelo, era cada vez mais escura, (continua)..-